

・今回のネパールの地震について

インドプレートとユーラシアプレートが合流するネパールは地震多発地帯で、これまでも大地震が発生し多くの被害が出ています。今回の大地震は、マグニチュード7.8、ネパール政府は、死者は8000名以上、負傷者は2万人以上と発表しました。

・我々の活動について

発災は4月25日(土)でしたが、派遣要請が来たのは27日(月)の夜でした。すぐに佐浦教授に相談し許可を頂き、業務調整および2週間の派遣のための準備をして翌日に出発しました。今回は機能拡充チームとして通常の倍の46名の隊員が成田空港に集まり、バンコク経由でカトマンズに到着しました。大型の日本チームは最も被害が大きいにも関わらず、医療支援が行き届いていないカトマンズから80kmほど離れたシンドパルチョーク郡へ行ってくれ、とネパール政府からの要請がありました。46名のうち11名がまずネパール軍のヘリで現地に向かいました。活動場所は自分たちで探すのですが、街の中心部の中学校の校庭を借りることができました。翌日の5月1日から診療を開始すると、骨盤骨折、肘関節脱臼、大腿骨骨折等の外傷患者が搬送されてきました。診療をしながら、この地域の震災前後の医療機関の状況を確認しつつ、今後の活動を計画していきました。

骨折の内固定など根本的な治療が必要な傷病者は、車で3時間ほどかかる病院へ搬送を余儀なくされますが、現地で可能な処置や手術は我々が行い負担を軽減するようにしました。

そしてトラック6台分の資器材(手術機材、麻酔器、レントゲン、ベッド、生活物資など)が届き、5月5日から本格的な診療体制となりました。開放脱臼骨折の整復、幼児の軟部組織損傷に対する処置など全身麻酔が必要な手術を6例行いました。術後は入院となるため今までの派遣ではなかった「当直」も経験しました(写真1)。またチームには理学療法士も1名いましたので、松葉杖での歩行訓練を8名の患者さんに指導してもらいました(写真2)。そして5月9日に2次隊に引き継ぎ予定どおり5月11日に帰国しました。

・今後の活動について

派遣に備えて様々な検討をしているのですが、実派遣のたびに課題が浮かび上がり、軌道修正をして次の派遣に備えることとなります。外務省が管轄する国際緊急援助隊が日本国内の災害医療支援を行うことはありませんが、これらのノウハウが国内の甚大災害にも生かされると期待します。



写真1 開放骨折の術後入院患者を診察する富岡



写真2 骨折患者に松葉杖指導を行う浅野理学療法士

新専門医 に聞く

今回新しくリハ科専門医になられた先生に抱負を語っていただきました。専門領域がそれぞれ異なりますが、リハ医学にかける情熱は大きく、これからの地方会を引っ張る新進気鋭の方々です。近畿地方会へのご支援を期待しております。(掲載順不同)

松岡 美保子 愛仁会リハビリテーション病院



愛仁会リハビリテーション病院(大阪府高槻市)の松岡美保子と申します。私は平成14年に自治医科大学を卒業し、大阪府に入職いたしました。大阪府立急性期総合医療センター、大阪府身体障害者福祉センター附属病院、障がい者自立センター、重症心身障害児施設「すくよか」での臨床と並行し、大阪府での医療・福祉行政にも関わって参りました。平成25年に大阪府を退職し、現職に至ります。これまでに職場内外でご指導いただきました皆様方に感謝いたします。

現在は、特に脊髄損傷リハに興味を持ち、臨床経験を積んでおります。四肢体幹の機能だけではなく、呼吸・消化器・排尿・痛み・痙縮・褥瘡予防等対応すべき点は全身に及び、精神ケアや社会制度を駆使しながらの退院、その後の長い人生、さらにロボットや再生医療等、勉強すべき内容が多く、日々楽しく取り組んでおります。未熟者ですが、今後ともよろしく願いいたします。

近藤 正樹 京都府立医科大学附属病院リハビリテーション部 京都府立医科大学大学院神経内科学



今回、リハビリテーション科専門医に認定いただきましたので、ごあいさつさせていただきます。私は、平成5年に京都府立医科大学を卒業し、神経内科に入局、認知症、高次脳機能、画像診断を中心に診療、研究に携わっておりました。縁ありまして、平成21年にリハビリテーション部で仕事をさせていただくことになりました。その中で、患者の機能、生活能力を改善するために、リハビリテーションが、重要な役割を担っていることを実感させていただきました。しっかりと腰をすえて、リハビリテーションを勉強したいと考え、臨床認定医を取得し、次いで、今回専門医試験を受験いたしました。これまで学んできた神経内科の経験、知識を生かして、リハビリテーション科専門医として努めていきたいと考えております。今後とも、ご指導ご鞭撻の程、お願い申し上げます。

原田 理沙 神戸大学リハビリテーション部



神戸大学リハビリテーション部の原田理沙と申します。肢体不自由児の教育に携わっていた母の影響でその医療を志し、H18年神戸大学卒業後同整形外科に入局、H23年同大学院整形外科博士課程修了後より、酒井特命教授のご指導の下、がん・急性期・小児など幅広く勉強させていただいております。専門医受験時は第2子が5ヶ月で育休中でしたが、試験勉強を通し自らの診療の至らない点を再認識でき、志新たに今年度より復帰しております。今後も研鑽を積み、微力ながら臨床・研究両面で患者様のQOLの向上に役立てるよう、また近年女性の割合が増加している医学生・若手医師にリハ医学の魅力を伝えていけるよう努力する所存です。ご指導宜しく願いいたします。

高田 俊之 兵庫県立リハビリテーション中央病院



この度リハビリテーション科専門医を取得させていただきました兵庫県立リハビリテーション中央病院の高田俊之と申します。本院に勤務後、回復期病棟での脳疾患のリハビリテーションを中心にリハ医療に関わって参りました。現在は内科出身なのもあって臨床業務と併せ、患者さんたちがより効果的なリハビリテーションが行えるようリハビリテーションにおける栄養管理、合併症管理の重要性について研究、学会活動を行っております。内科医としては苔の生えた人間ですが、リハ医としてはお尻にから殻のついたまま歩いている状況です。今後ともご指導の程よろしく願いいたします。

東本 有司 近畿大学医学部呼吸器アレルギー内科



みなさん初めまして。私は普段、呼吸器内科医として勤務しておりますが、ここ10年ほどは呼吸リハビリテーションに興味をもって取り組んでおります。とゆうことで、中途半端はいけないと思い、呼吸器学会専門医の上にリハ学会の専門医もとることにいたしました。ただ、勉強してみるとほとんどが専門外となりますので、年齢による記憶力低下を実感しながら半年間勉強しました。勉強する上では福田教授とリハ専門医の先輩先生（といっても二回りほど年下ですが）に大変お世話になりました。現在は、呼吸器科医としての診療の他、週2回呼吸リハ外来をPT,OT、栄養士さんと楽しくしております。呼吸器系の国際学会には毎年PTさんと参加しております。先日もアメリカ呼吸器学会に若いPTと一緒に発表してきました。リハ科専門医としてはまだまだ新米ですので、皆様のご指導お願いいたします。

城戸 顕 奈良県立医科大学整形外科



私は奈良県立医科大学を平成2年に卒業し、運動器疾患の診療・研究に従事して参りました。前職の奈良県救命救急センターでは頸髄損傷・広範囲熱傷・骨盤外傷など高次外傷を担当、平成16年からは奈良医大にて骨軟部腫瘍・がんの骨転移・関節リウマチと骨系統疾患の分子治療を含む薬物療法・手術療法・リハビリテーションを通し、さまざまな障害のマネジメントに永くあたって参りました。根治の為に年間近い入院化学療法を要する学童・思春期の骨悪性疾患では、精子保存・妊孕性から骨髄抑制、広範切除・機能障害から復学（復職）支援までまさに“オンコロジー”から“リハマインド”の架け橋を果たし続ける必要があります。向後は障害の様態もアプローチ手法もいっそう専門化・細分化が進む時代とは存じますが、「患者の側に立ち、何にこまっているかを一番に考える」医師としてリハ科専門医の諸先輩にご指導を賜りたいと考えています。どうかよろしく願い致します。

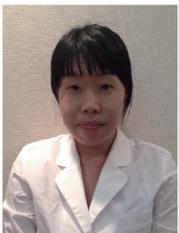
**山川 知之 独立行政法人国立病院機構姫路医療センター 整形外科**

この度、リハビリテーション科専門医を取得させていただきました独立行政法人国立病院機構姫路医療センター整形外科の山川知之と申します。平成9年卒業後、京都大学整形外科に入局、静岡県立総合病院、三菱京都病院、京都大学大学院、神戸市立医療センター中央市民病院、丹後中央病院そして現病院にて研修、研究、鍛錬することで、リハビリテーションの重要性に痛感させられました。専門医試験に合格し、ようやくリハビリテーション医療の第一歩を踏み出したと身の引き締まる思いです。これからも、諸先生方にご指導いただきながら研鑽を積んでいきたいと思っております。

今後とも、相変わらずのご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

**酒田 耕 みどりヶ丘病院 リハビリテーション科**

大阪府高槻市にある祐生会みどりヶ丘病院リハビリテーション科の酒田耕です。建築の世界で5年ほど働いた後、方向転換し医師となりました。初期研修終了後、豊中市にある回復期リハビリテーション病院で4年間勤務し、この春から現在の職場で急性期、回復期両方の診療に関わっています。急性期の早期から適切なリハビリテーションを行い、とぎれなく回復期へつなげていくことが本当に大事だとあらためて感じています。それをしなければ寝たきりになっていたであろう患者さんを歩いて退院させることができるのは本当にこの仕事の醍醐味だと思います。理想は日本全国どここの病院でも適切なリハビリテーション医療が受けられることです。これからも専門医として患者さんに最善のリハビリテーションを提供できるように日々研鑽を積んで参りたいと思っておりますので、どうぞご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

**岸本 恵美理 近畿大学 リハビリテーション科**

この度、リハビリテーション科専門医に認定していただきました、岸本恵美理です。平成20年に近畿大学医学部を卒業し、徳島赤十字病院での臨床初期研修を経て、近畿大学医学部附属病院リハビリテーション科へ入局しました。整形外科疾患や脳血管障害、周術期など急性期病院での多彩な症例を経験させていただきました。ご指導いただきました先生方に感謝申し上げます。

やっと、リハビリテーション医としての第一歩を踏み出したと身の引き締まる思いであります。現在はみどりヶ丘病院で摂食嚥下や回復期について勉強させていただいております。幅広いリハビリテーションの分野で少しでも貢献できるよう努力し、経験を積んでいきたいと思っております。まだまだ未熟者ですが、今後ともご指導いただけますよう、よろしくお願い申し上げます。

**三好 正浩 関西リハビリテーション病院**

関西リハビリテーション病院の三好正浩と申します。平成13年に三重大学を卒業し、神経内科医として主に脳卒中の急性期医療を中心に診療に携わってまいりました。当時から急性期では寝たきりや車いすでの生活を余儀なくされていた担当患者さんが、回復期リハビリ病院（主に七栗サナトリウム）に転院し、退院後に私の外来に歩いて受診される姿を多く見て、「回復期リハビリってどんなことをしているのだろうか？」と強く興味を抱くようになりました。その後神経内科専門医、脳卒中専門医を取得後、平成23年より現在の職場でリハビリ科医師として働いています。この度、リハ科専門医も取得することができました。現時点では、「脳卒中」で困っていらっしゃる患者さんの、少しでもお役にたてるような医師を目指したいと思っております。引き続きご指導ご鞭撻の程宜しく申し上げます。

**新井 隆三 京都大学整形外科**

このたび、リハビリテーション科専門医の資格をいただきました、新井隆三と申します。バックグラウンドは整形外科です。専門医試験の勉強をする中で、改めてそのカバーしなければならないフィールドの広さに圧倒されました。この多方面から寄せられる多彩な要望を整理しきれず、「ただなんとなくリハビリしてしまう」ことがないようにしなければならぬと思えました。リハビリに励もうとする患者さんのニーズをとらえ、担当主科の治療方針を認識したうえで、病院外での生活につながるように目的意識をはっきりとさせたトレーニング環境を構築したいと思います。

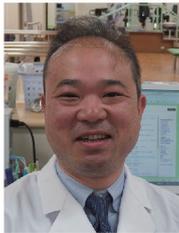
今後ともご指導のほど、なにとぞよろしくお願い申し上げます。

川崎 拓 滋賀医科大学



この度リハビリテーション科専門医の認定をいただきました川崎と申します。私は平成4年に滋賀医科大学整形外科に入局し、その後関節外科医として人工関節（股・膝・肘）、骨切り術、股関節鏡などの手術から、生物学的製剤などを用いてのリウマチ性疾患の薬物治療まで担当しておりました。平成24年よりリハビリテーション部に配属となりリハビリテーション医学に取り組んでまいりましたが、勉強すればするほど心臓リハ・嚥下リハなどリハビリテーションの奥の深さを実感させられました。今後は専門医として滋賀県ならびに近畿地区のリハビリテーションの発展に微力を尽くしてまいりますので、今後も引き続きご指導よろしくお願い申し上げます。

池口 良輔 京都大学整形外科



この度、日本リハビリテーション医学会専門医の認定を頂きました池口良輔と申します。私は平成5年に京都大学を卒業後、整形外科に入局し、手の外科、マイクロサージャリー、外傷外科を専門として参りました。平成26年4月より京都大学リハビリテーション科に勤務させていただいております。手外科とリハビリテーションとは関係の深いもので、手術療法のみでは治療は成り立たず、リハビリテーションがあつての手術であり、理学療法士と作業療法士の皆さんと一緒に日々診療にあたってきました。運動器疾患だけでなく、リハビリテーション科は対象疾患が広く、院内では患者様が最も多く、重要な科であることを最近では痛感しております。今後は診療のみならず、研究活動、若手医師の育成とリハビリテーション医学会の発展のために少しでも貢献できるよう尽力していきたいと思っております。今後とも御指導御鞭撻の程、宜しく願い申し上げます。

池田 宜史 名手病院



このたびリハビリテーション科専門医の末席に加えて頂きました、名手病院の池田と申します。市中病院で消化器内科医としてのキャリアを積んでおりましたが、2007年より地域密着型の病院で内科全般の診療を担当するようになりました。虚弱高齢者を診る機会が圧倒的に増え、短期の安静臥床で容易に廃用症候群に陥ってしまう現実に愕然とし悪戦苦闘する毎日でしたが、和歌山県立医科大学リハビリテーション医学田島文博教授の「Whole body」の理念に接し、リハビリの可能性を確信するに至りました。以後自分なりにリハビリ医としての研鑽を積んでいる途上ではありますが、研修や専門医試験受験に際し様々な御配慮を頂きました田島教授、亀田浩司先生をはじめとした諸先生方にこの場をお借りし改めて厚く御礼申し上げます。今後とも微力ながら地域のリハビリの普及・発展に尽力していく所存ですが、まだまだ経験も浅く若輩者ですので引き続き皆さまの御指導・御鞭撻の程どうぞ宜しくお願い致します。

池田 紗綾香 兵庫医科大学病院リハビリテーション部



この度リハビリテーション科専門医を取得させていただきました池田紗綾香と申します。平成22年に兵庫医科大学リハビリテーション医学教室に入局し、現在兵庫医科大学病院に勤務しております。医師となり診療をしていく中で退院すればそこでゴールとなる医療に疑問を感じ、患者さんに寄り添う医療ができるのはリハビリ科だと思い入局に至りました。

大学病院でのリハビリは急性期を中心とした脳神経疾患、内部障害、がん疾患をはじめ、慢性期脳卒中のCI療法など多岐に渡っており、勉強不足を日々痛感させられる毎日です。まだまだリハ医として半人前ではありますが、諸先生方にご指導いただきながら研鑽を積んでまいりたいと思っております。

今後とも御指導、ご鞭撻の程宜しく願い申し上げます。

笹山 瑠美 石川病院



この度リハビリテーション科専門医の認定をいただきました笹山と申します。平成21年に高知大学を卒業し、地元兵庫に戻って2年間の初期研修を受けた後、リハビリテーション科を専攻しました。大阪医科大学で2年間のレジデント研修を受け、京都の第二岡本総合病院で1年間勤務した後、昨年4月から姫路市の石川病院で勤務しております。多くの先生方に教えていただく機会に恵まれたこと、いつもリハ医の仲間がいる環境で研修できたこと、大変感謝しております。また専門医試験受験に当たり、色々とサポートしてくださった先生方、ありがとうございました。これからも先輩方の背中を追いかけながら、日々の診療を頑張っていきたいと思っております。今後ともご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。



藤本 宏明 森之宮病院



このたびリハビリテーション科専門医の認定をいただきました、森之宮病院の藤本と申します。平成 17 年に兵庫医科大学を卒業後、大阪大学神経内科に入局し、主に神経疾患診療に携わりました。平成 24 年より森之宮病院の神経リハビリテーション研究部に赴任し、回復期リハビリ病棟で主に脳卒中後リハビリ研修を行いながら、主に「姿勢バランスと大脳皮質活動との関連性」をテーマに研究させていただいています。

リハビリ医療に携われるようになり、機能予後や社会背景を考えることで視野が広がりました。患者さんやご家族の不安を和らげ、その後の生活への橋渡しになるよう、また、現在行っている研究内容を少しでも臨床へ還元できるように努力してまいります。

専門医となり、ようやく自称「神経リハ医」としての第一歩を踏み出せたことを実感しています。臨床・研究どちらも未熟ものですが、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い致します。



木戸 健介 松下記念病院



このたび専門医の認定をいただきました木戸健介（きどけんすけ）と申します。平成 10 年に京都府立医科大学を卒業し整形外科医として勤務してきました。現在は松下記念病院で骨折の手術や、変形性関節症に対する人工関節全置換術による機能再建などの急性期治療を担当しています。しかし、以前に京都大原記念病院で回復期病棟の病棟医として 3 年間勤務していた事があり、整形外科症例以外にも脳血管障害症例、脳外傷症例、神経疾患症例などを担当する機会も多く、また大腿骨近位部骨折地域連携パスの立ち上げでは、急性期と回復期の立場での臨床経験をいかして参加することができました。こうした経験からリハビリテーションが担当する領域の広大さに興味を持ち日本リハビリテーション医学会に入会させていただきました。皆様には今後ともご指導ご鞭撻のほどいただけますよう、なにとぞよろしくお願い申し上げます。

第29回日本医学会総会2015関西が開催

和歌山県立医科大学リハビリテーション医学 中村 健

第29回日本医学会総会2015関西の学術講演が、4月11日（土）～4月13日（月）の3日間、国立京都国際会館をメイン会場として開催された。日本医学会総会は明治35年の第1回の開催から4年に1回開催されており、今回が29回目の開催となる。会頭を井村裕夫先生が務め、メインテーマを「医学と医療の改革を目指して－健康社会を共に生きるきずなの構築－」とし、関西2府4県でプレイベントを行うなど、関西の12医科大学/1機関/6医師会が協力し『オール関西』の体制で開催された総会となった。

開会式は、メインホールを埋め尽くす多くの参加者のもと、皇太子殿下もご臨席し行われた。開会式では、皇太子殿下のお言葉もあり、その中で「いかににより多くの人々が健康で長寿を享受できるような社会にするのが問われています。（全お言葉は宮内庁ホームページを参照）」と述べられており、今後の医療の課題をお示し頂いた。開会式に引き続き、山中伸弥教授による開会講演「iPS細胞研究の現状と医療応用に向けた取り組み」が行われた。iPS細胞の現在までの研究開発成果、そして今後の医療応用を含めた展望について話され、多くの医療分野でiPS細胞の利用が実現しつつある事を力強く述べていた。

学術講演では、テーマである「医学」「医療」「きずな」に基づき『20の柱』が立案され、分野や職種を超えた横断的な100を超えるセッションが行われた。20の柱の1つに「リハビリテーションのこれから」が盛り込まれ、『リハビリテーションは進化する：「守る」から「攻める」へ』、『運動器リハビリテーションのこれから（進



歩と展望』、『新しい時代の心臓リハビリテーション：エビデンスと実際』、『有効な中枢性運動麻痺治療方法』の各テーマに関して、3日間に亘り4つのセッションが総勢座長8名演者20名で行われた。近畿地区からは、座長として大阪医科大学の佐浦隆一先生、枚方公済病院の野村隆司先生、演者として和歌山県立医科大学の田島文博先生、国立循環器病研究センターの後藤葉一先生、京都府立医科大学の久保俊一先生、京都府立医科大学の白石裕一先生、兵庫医科大学の道免和久先生（発表順）が務められ、私も演者の1人に加えて頂いた。各セッションともに盛況だったが、特に『運動器リハビリテーションのこれから（進歩と展望）』のセッションでは、会場に入りきれないくらいの聴衆が集まり、リハビリテーション医療へ